

1	事業名	試験研究調査費	予算額	23,600	千円
2	事業細目	(試験研究調査項目) 資源研究調査費(漁況予報調査研究)	予算額	1,187	千円
3	期間	15年度～ 年度	予算区分	県単	
4	担当者	岩崎、里井、田沢、氏家、沢田			
5	目的	琵琶湖産アユの円滑な需給を計るため基礎資料の収集と漁期に応じて精度の高い予報を目標として各種調査を実施し漁況予測を行う。また、本事業の調査結果は、資源管理、資源保護の技法を確立するための重要な基礎資料ともされる。			
6	方法	(1) 魚探調査 4月～8月、月1回魚群探知機で湖中アユ生息状況調査 (2) 漁況調査 4月～8月、月3回水域・漁具別の漁獲状況の聴取調査 (3) 産卵調査 9月上旬～11月上旬までの間に産卵主要11天然河川を対象に第5次まで調査、人工河川については、8月下旬～11月中旬までの間に第6次まで調査 (4) 氷魚生息状況調査 11月・12月に月1回北湖30水域を夜間稚仔魚採集網を用いて氷魚を採集 (5) 餌料生物調査 11月～3月に月1回(4)の調査水域のうちの18地点を対象に夜間プランクトン採集			
7	結果の概要	(1) 魚探調査 産卵期直前の8月の出現群数は、57群で平年の139%であった。 (2) 漁況調査 昭和61年度の漁獲状況、過去史上最高年の昭和58年(1,741 t)を凌ぐほどの漁況であった。 (3) 産卵調査 昭和61年の有効産着数で天然河川が64億粒、人工河川が80億粒、計144億粒で平年の255%であった。これを流下仔アユ数に換算して過去と比較したものを図-1に示した。 (4) 氷魚生息状況調査 11月の湖中氷魚の生息密度は、101尾/1曳網当りで平年の73%、この平均体重が62mgで平年の152%であった。12月の湖中氷魚の生息密度は、47尾/1曳網当りで平年の55%、この平均体重が168.6mgで平年の184%であった。 (5) 餌料生物調査 本年の大型プランクトン現存量は、平年より低いレベルで推移 (6) 昭和62年前期の春アユの漁況予測 昭和61年12月～昭和62年3月までのアユ漁況を予測すると、総漁獲量が210トン、そのうち鮎苗として利用される漁獲量が152トンと推定され、図-7、図-8のとおりそれぞれの平均値192トン、138.5トンと比べてあまり差がないところから、気象条件等に特別の異変がない限り、平年並に推移すると考えられる。			

8 主要成果の具体的数値（図・表 等）

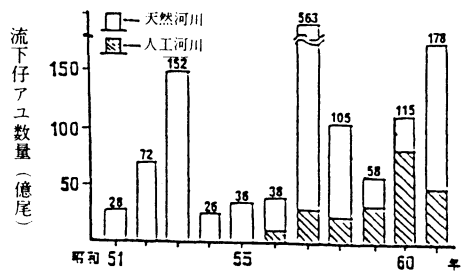


図1 流下仔アユの状況

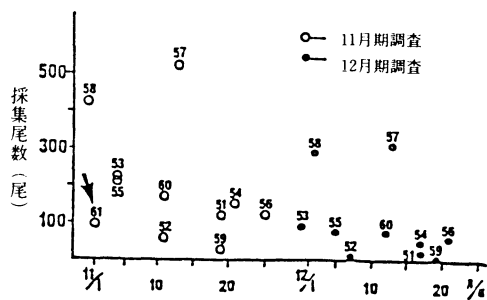


図2 調査日と採集尾数の関係

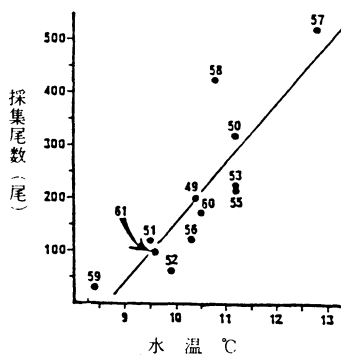


図3 10月湖心部の25m層の水温と11月期のヒウオ採集尾数との関係

(昭和54年は台風の影響で高水温となったので除いた)

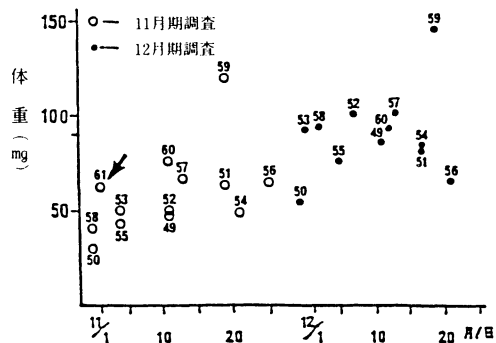


図4 調査月日と体重の関係

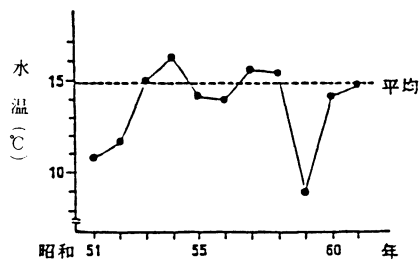


図5 舟木崎～多景島の間地点の11月期20m層水温

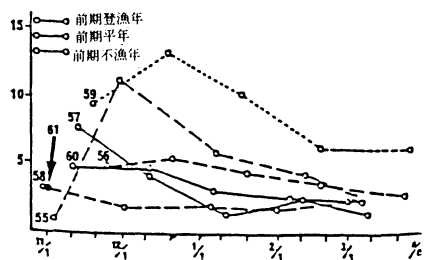


図6 大型動物プランクトン現存量の変化

9 今後の問題点

漁獲時期別、水域別、漁具別の漁況予報の確立

10 次年度の具体的計画

昭和61年度と同様継続